

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4373201146		
法人名	社会福祉法人 鶴亀会		
事業所名	グループホーム龍ヶ岳		
所在地	熊本県上天草市龍ヶ岳町大道158番地		
自己評価作成日	令和2年11月3日	評価結果市町村受理日	令和3年2月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和2年11月20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者の方の、その人らしい尊厳なる姿を大切にしています。くつろげる場所と、混乱せず済む心遣いをしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

昨年の外部評価の結果を受け、管理者を中心に改善点や新たな取組を見出し、全職員で努力していることが、書類や聞き取り、現場の様子から十分確認された。医療体制の変更は高齢化する入居者にとって、負担軽減にも繋がりが居ながらにして医療支援を受ける事で、入居者・家族の安心となっている。会話のやり取りが難しい方には、職員のアイデアにより「筆談帳」を作成し、ゆっくり入浴を楽しんでもらうなど工夫されている。また、食事は入居者の楽しみであることを認識し、メニュー内容の見直しや朝食のメニュー増、手作りおやつを増やすなど食の安定と満足の上に向け取り組んだことが、運営推進会議でも報告されている。馴染みの海を見ながらの生活は、入居者にとって何よりの喜びとなっており、外出がままならぬ中にあっても、職員の創意工夫により室内活動の充実や、身近な散歩など出来る事で笑顔を引き出すよう努力している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念を定期的に確認し、常に念頭に置いて対応検討時や実践など、普段の業務に反映していけるよう努めている。	入居者一人ひとりが「その人らしく」生活するために、個別ケアに力をいれている。管理者を中心に前回の外部評価後の改善点や新たな取組を見出し、入居者の生活歴やホームの暮らしぶりから会話の難しい方に、これまで以上に入浴を楽しんでもらうよう“筆談帳”を作成し、質問カードに合わせて身振り手振りで表現してもらう等、細部に工夫が見られる。理念を定期的(1月、6月、9月)に確認し、法人共通の接遇委員会によるアンケートや2か月ごとのスローガンの設定により、理念をより具体的に捉えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	定期的にドライブなどの計画を入れ、馴染みの場所での散策や、祭りや文化祭等の行事ごとにも施設に積極的に招き、地域とのつながりを継続できるよう努めている。	施設長は入居者のこれまでの生活圏や地域性など、背景を考慮したうえで、地域密着型事業所として安定したクオリティが必要としている。立地的にみても、日常的に地域の人々と交流する機会は少ないが、例年であれば法人行事(納涼祭・法話)や、子ども神輿の訪問などが行われており、コロナ感染症によりホーム単独での行事に切り替え対応している。	職員は地域交流の必要性を十分認識しており、行事や外出が制限される中、行政の広報誌などの情報から必要な内容を入居者と共有したり、ホーム周辺の散策の継続などできることで地域とつながり続ける事が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所の成果を地域の方々に伝える場合は、運営推進委員会や、利用者のご家族等から以外に、現在のところないが、他施設での研修等を踏まえた繋がり等、検討の必要性は感じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所からの報告と参加メンバーからの意見、質問、要望を受け、双方向的な会議を実施するとともに、その意見を活かした検討を行い、必要時は実践に取り入れている。	本年は感染症による社会情勢を見ながら、8・10月に行政や地域代表者の参加により開催が実現している。毎回、議題を設定し、参加者からの幅広い意見を収集して運営に反映している。本年度新たにスタートした医療支援の変更(受診から往診へ)や、意見箱の設置、ケア記録様式の見直しなど、医療体制の変更や業務改善について詳しく説明を行っている。	現在、会議に参加する家族を調整中であり、実現が待たれる。また、会議内容については、全家族への報告と併せ、同時に意見の引き出しに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進委員会以外では、市の担当と連絡を取り合うことは少ない。制度解釈に関する質問を受けてもらう程度。	運営推進会議に行政担当者が参加しており、ホームの現状を発信し、設定した議題に沿って、市の取組などが報告されている。今年度は感染症についての情報発信が多く、管理者が直接出向く機会はなかったようである。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関して施設委員会の活動を通して、研修やチェックを定期的に行い、常に拘束とならないよう各スタッフの知識向上や、意識づけを行った上での各種対応の検討を実施、安全面に配慮した自由な暮らしを目指している。	法人全体で身体拘束や虐待をしないことを前提としており、職員は高い認識を持って支援にあたっている。拘束ゼロに向けた指針を作成し、全体研修やチェック表により自己を評価し、外出傾向にある入居者へも静止することなく、さりげなく声をかけたり、そのまま庭の散歩に出る等入居者の思いを封じ込めない対応を優先している。人感センサーの使用については、家族への説明と了承を得ている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会やミーティング、委員会の設置や研修など、虐待防止法の遵守に向けた取り組みを行っている。また、防犯目的でのカメラ導入など、積極的に検討している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	当制度について、事業での研修はしていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ご家族の意向をくみ取り、時間をかけ出来るだけ丁寧に説明している。重度化や看取り対応、利用料金等については特に詳しく説明し、同意を得るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の言動から思いを察する努力をし、利用者本位の運営を心掛けている。また必要ならご家族宅に訪問し、要望を聞くようにしている。ホーム玄関には意見箱を設置し、ご家族が意見を引き出すよう努めている。	家族が意見や要望を申し出る機会として、新たに玄関内に意見箱を設置し、運営推進会議への家族の参加を調整している。現在、家族の希望や状況を見ながら入居者との窓越し面会を行い、これまで利用料を持参されていた家族には、報告を兼ね職員が自宅を直接訪問するなど関係継続のための工夫をしている。また、月の便りには入居者の近況を写真を入れて報告し、家族から「表情が見れて良かった」との声があがっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ホームでの定例研修会(月1回)の他、随時話し合う機会を設けている。必要な場合は施設長との個別面談等の機会も設けている。	職員は月の会議をはじめ、普段から何でも言い合える職場環境作りに努力している。一人ひとりが得意分野を発揮し、日々の食事や手作りの棚などにより共有空間の充実に反映されている。施設長はホームを訪れる際には、管理者と現状を共有しながら職員意見について検討し、必要によっては個人面談の機会を設けながら、運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の資格取得に向けた支援を積極的に行っている。 労働環境も、本人の意向を踏まえ、資質を活かせるよう検討している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的に内部研修を行い、外部の研修にも職員各自の習熟度に応じて参加し、研修報告の場も設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	圏域での連絡会があり、交流会、スタッフ研修を実施して質の向上を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの利用について相談があった場合は、必ず本人と面談し、心身の状態を確認の上、本人の思いに向き合い、職員が本人に受け入れてもらえるような関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族が求めていることを理解し、ホームとしてどのような対応ができるのかを事前に話し合っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご家族の意向を時間をかけて聞き取り、ホームとご本人の状況に合わせた対応の検討を行い、必要時は他のサービス含めた話し合いも行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	支援する側、される側という意識を持たず、お互いが協力しながら和やかな生活ができるよう、場面作りや声掛けをしている。ご利用者からは「お互い様」という言葉も聞かれる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、ご家族の思いにも寄り添いながら、日々の暮らしの情報共有に努め、利用者と一緒に支えるために支援していることを伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご利用者の行きつけの商店や美容院にでかけ、知人との会話等ができるよう、出かける機会を作っている。希望者は少なくなってきたが、今後も取り組みは継続していく。	コロナ禍においては家族の面会制限をせざるを得ない状況であるが、様子を見ながら窓越し面会などを実施し、職員が自宅訪問で入居者の様子を伝えながら、関係性が希薄にならないように心を配っている。ホームの中で日々生活を共にする職員や、入居者同士も馴染みの関係であり、昼食のテーブルを囲みながら、やがてくる新年に「好かんな～また、一つ年を取る」と、にこやかに笑われる姿にここでの暮らしぶりが窺える。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個人の性格や他の方との相性を職員相互で情報共有し、関わり合いの持てる場所(パブリック)を整備し、ご利用者同士が交流できるよう働きかけている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご利用終了後も、ご家族からの相談に乗っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で、常にご本人に合わせた対応を念頭に置いたケアの組み立てを行っている。困難な場合はご家族も含めた検討を行い理解も得ている。	職員は入居者との普段の関わりからホームでの暮らしの中でしたいことや、して欲しいことなど、具体例をだしながら、思いを引き出すようにしている。会話による意思表示は難しい方には、筆談帳に手や体の動き、顔の表情でイエス、ノーを応えてもらい、本人の思いを確認するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始から、ご本人、ご家族からの聞き取りを行っている。また、その情報をすぐに記録するノートを設けており、些細なことでも記録するよう周知している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご利用者一人ひとりの生活リズムを理解すると共に、出来ないことより出来ることに注目し、その人全体の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人やご家族には日々の関わりの中で意見、要望を聞き、介護計画に反映されるようにしている。 半年毎に、アセスメントを含め職員全体で意見交換を行っている。	本人・家族の意向を優先し、職員の日々の気づきをカンファレンスで検討してプランを立案している。半年を目途に評価し、あらためて入居者・家族の思いを確認しながら、現状に即した内容を具体的に盛り込んでいる。入居間もない方のこれまでの生活背景や、“自分のペースで暮らしたい”との声を尊重し、歩行手段も状態や時と場合を見ながら車いすや歩行器、杖を使い分け、残存能力の維持、向上を目指す内容としている。	ケア記録様式の見直しにより、日々の個別記録がより詳細になりケアプランに反映されるものと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	時間軸を基にしたケア記録様式の見直しを行い、それぞれのスタッフが気付いたその時に記録し、他のスタッフも確認しやすいよう工夫している。その記録を基に経過観察や計画の見直しを検討している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族の状況に応じた通院や送迎等、必要な支援を柔軟に行っている。また、協力病院との連会にて訪問診療等も取り入れ、ご利用者の選択肢も増えてきている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ご利用者が安心して地域で暮らしを続けられるよう、区長、消防団指導隊長と意見交換する機会を設けている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	複数の医療機関と連携を保っている。提携病院の訪問診療を基本としながら、ご家族、ご本人の希望や状況により、必要な受診や通院を行っている。	かかりつけ医については、家族の了解のもと協力医療機関による訪問診療を中心に、本人の希望や状況に応じて適切な医療が受けられるようにしている。職員は日頃の関わりから異常の早期発見に努める他、毎食後の歯磨きを見守りや介助に努め、必要に応じて歯科受診が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	経過記録とは別に医療面専用の個別カルテを作成し必要な情報をカルテにまとめ、医療的観点の情報共有、観察がしやすいよう工夫している。 ご利用者に変化があった場合は、都度の看護師相談を基本とし、指示を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、本人に関する支援情報を医療機関に提供し、3日に1度は職員が見舞うようにしている。また、ご家族とも、ご本人の状況の情報を共有し、速やかな退院支援に結び付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルケアに関する方針を定め、入居時にも意思確認を行っている。	ご縁のあった入居者を最終まで支援していきたいという思いはあるが、現状では継続した医療が必要となれば、医療機関での対応としている。入居時や必要に応じて意向や思いは聞き取っており、不安のないよう、家族からの相談には適切に応じている。	今後も日頃の関わりを大切に、ホームにできる最良に支援に努めていかれることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応マニュアルを掲示又はファイリングし、常に確認やイメージができるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練や消火器の使い方等、定期的に行っている。また、施設防災マニュアルをファイリングいつでも確認できるようにしている。 施設での防災訓練や、緊急時の備蓄管理や電源確保等も行っている。	今年度は6月と10月に火災訓練を実施している。10月の訓練では、グループホームからの出火想定で行っている。管理者は今後、消防署に加え地域の消防団との連携も大切にしていきたいとしている。災害時の備蓄として3日分を確保している。	昨今の自然災害がもたらす被害は想像を超えるものがあり、今後も熊本地震や先般の豪雨被害などを振り返る機会を持つ事も必要と思われる。また、管理者が語っている地域消防団との連携についても取り組みに期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	援助、介助時にも、まずはご本人の気持ちを大切に考え、さりげないケアを心掛けたり、自己決定がしやすい言葉の掛け方をするように努めている。	職員は特に排泄支援時の声掛けや誘導については、プライバシーに配慮する他、自己決定しやすい声掛けを個々に応じて行うようにしている。呼称は入居時に本人や家族に尋ねており、基本的に苗字にさん付けとしているが、要望から相性での対応も行われている。職員の守秘義務については、入職時や研修会の中で周知徹底が図られている。また、身だしなみも要望やその方の個性を生かせるよう、家族の協力も得ながら支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々に合わせた、ご本人が答えやすく、選びやすいオープン、クローズな問いかけ方を意識した働きかけをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの希望や思いを把握しつつ、環境整備や物品の購入を行い、自由に過ごせる空間を意識した環境作りを行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ホームにて美容の日を設けたり、居室洗面所の使用にて、その人らしさを保てるようなお手伝いをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好みの味付けや、食べやすい大きさ、硬さ、盛り付け量など、個々に合わせた細かな対応を心掛け、少しでも食事を楽しんでいただけるよう努めている。また、季節に応じた行事食や、誕生食など、ご利用者の刺激や喜びとなるよう努めている。	食事は入居者にとって楽しみの一つであり、季節に応じた献立にそって、地元の食材を活かしながら、ホーム内で調理されている。時には刺身が食卓にのぼることもあり、入居者にとって更に話も弾むようである。また、自身の箸や介護の状態に応じた自助具や食形態など、個々に応じた食事が提供されている。盛り付けやお盆の色も白から、ピンクやグリーンに変更するなど、入居者に目でも食事を楽しんでもらえるよう努めている。食材は配達されており、入居者が買いものに同行する機会はないが、食材を見て調理方法を聞いたり、下膳や味の評価など、出来る事で食への関わりを支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食事量のチェックを行い、医師の指示による定期的な血液検査等にて健康状態の把握も行っている。また、食欲のない場合は、パンやお菓子、栄養補助ムースやジュース等を提供し、栄養バランスの確保に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝夕のイソジンによるうがいを毎日行っている。また、洗浄剤による義歯の消毒や、ブラッシング等、本人の能力に応じた口腔ケアを実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	チェックシートや排泄の記録、医師相談による便秘薬等の適切な用法、用量にてスムーズな排泄を促し、時間や回数の把握を行い、必要時の誘導やポータブルの使用、リハビリパンツ、パッドなど本人の状況に合わせた支援をしている。	日中は基本的にトイレでの排泄を支援している。現在、リハビリパンツを使用の方が中心であるが、布パンツの方も3名おられる。日中や夜間のみ使用される方のポータブルトイレは清潔を心掛け、気持ちよく使用できるようにしている。また、声掛けや誘導、トイレ内のカーテンの取り付けなどもプライバシーに配慮している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一人ひとりの食事、排泄、活動状況などを見直し、自然排便や服薬管理によるスムーズな排泄を促すよう個別に工夫している。また、24時間での排便タイミングの把握や、便秘薬の服用時間等も記録し、必要時の検討を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	あらかじめ個々の要望に沿った曜日を決め、それを基本に希望等を踏まえた柔軟な組み換えを行うよう努めている。また、身体状況に合わせた入浴具や浴槽の検討も行い、無理なく快適に入浴できるよう対応している。	希望の入浴曜日などを聞きながら、基本的に週2回の支援を行っている。入浴は清潔保持に加え、声掛け・誘導から始まり、スムーズに進むことで楽しい気分でもらえるようにしている。また、入居者や職員にも負担なく、安全に入浴できるよう、身体状況に応じて、備品の検討を行っている。意思表示が困難な方には、職員のアイデアで“入浴用筆談セット”が作成されている。カードは「ぬくもってきましたか?」「もう少しつかっていてもいいですよ!」など方言を使いわかりやすくした内容となっており、職員のアイデアが活かされている。	季節湯(菖蒲・柚子など)を支援する際は、啓発ポスターを掲示することで、当日への期待や、来訪した家族との会話のきっかけにもつながると思われる。取組に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	培ってこられた生活習慣を大切に、無理な覚醒促し等は控えた対応を心掛けている。また、個々の体調に合わせた離床や臥床時間を検討しながら、無理なく安心して過ごせるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員全員が服薬内容を把握できるという、個々の情報を介護経過記録と合わせて確認できる工夫をしている。また個人カルテにも効能等をファイリングし内服薬に関する理解と観察を高めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの得意分野を活かせるよう、お願いできそうな仕事を頼み、職員から感謝の言葉を伝えて、本人のやる気に結び付けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩の時間を設けたり、希望があれば付き添いながら外周を散歩するなど、外気に触れる時間を大切にしている。また、ドライブ等の時間もつくり、個々の馴染みの場所へ出掛ける等の援助も行っている。	管理者は「コロナ禍にあったが、出来ないなりに、敷地内の散歩をしながら、草花を摘んだり、海を眺めるなど、出来る事で外気浴に努めた」と語っている。また、状況に応じて馴染みの場所への外出にも可能な限り取り組んでいる。これから寒い日々になっていくが、桜の開花など外出が楽しい季節には、コロナが少しでも終息していることを、入居者・家族と共に願っている。	コロナの終息が見えない現状であるが、立地を生かした身近な散歩や散歩をはじめ、外出気分を味わえる雑誌やビデオなど、引き続き職員のアイディアや一工夫に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ホームにて金銭管理をすることになっているご利用者でも、外出時に預かっている現金を手渡し、自分で買い物や支払いができるよう援助している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族には毎月、ハガキでの近況報告を行っている。また、携帯電話が使われる方の、使い方の援助や、希望がある場合は施設電話にて、ご家族との会話も楽しんでもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	スタッフの大声でのやりとり、雑談を避ける。また、感知センサーを子機式に変え、大きな音が鳴らなくてもスタッフが対応できるよう変更。臭気にも配慮し芳香剤や消臭剤、密閉性の良い汚物入れ等を設置。生花担当を決め、季節の草花で常に彩るよう配慮した空間づくりに努めている。	この一年、職員のアイデアや工夫を活かし、安全面や使い勝手を考慮しながら、入居者や来訪者にとっても居心地のよい共用空間作りに努めてきたことが、聞き取りや現場からも確認された。入居者が日中の大半を過ごす居間もその一つで、入居者の作品などは特に心和むものである。また、職員自身が重要な環境の一つであることを十分理解し、日々の支援にあたることを会議などで事例をあげながら共有を図っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブル、椅子やテレビの配置などを工夫し、個々の過ごし方や動線を考慮した環境作りを行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご利用者個々の馴染みのものや、生活スタイルに合わせた物品の整備を行い、ご家族への相談や、購入の検討など、柔軟な対応を心掛けている。	本人にとって居室での時間が居心地の良いものとなるよう、職員は入居時の持ち込みやその後も必要な品について連携を図っている。家具をはじめテレビ、冷蔵庫などの家電品は自宅の雰囲気により近くなっている。コロナ感染症により家族が居室を訪れる機会は制限されており、今年度は職員が中心になって、居室の環境整備を進めており、不足の品や相談をはじめ家族への連絡の機会は多くなっているようである。	家族にとって居室内の様子は気になるところであり、今後も電話や写真など家族の安心に繋がる連携方法を継続していかれることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ご利用者にとって分かりやすい表示や方法を考え、出来るだけ利用者本人の力が活かせる工夫を追及している。また、本人の能力でやれることを増やせるよう、手すりの増設や家具の設置など、環境整備にも努めている。		